

「やまこし復興交流館(仮称)」整備方針(案)

平成24年7月20日 開催、「やまこし復興交流館(仮称)展示運営委員会」資料より

視点: 震災/過去の記憶/教訓

- ・どこにでもあるようなハコモノ「地震資料館」ではなく、山古志全体をフィールドとしてリアリティを追求する
- ・この施設では、災害にあった山古志住民たちが学芸員

フィールドミュージアムの基点となる施設

視点: 復興/未来への取り組み/地域経営

- ・地域振興を担える施設をめざし、持続可能な暮らしの仕掛けづくりを行う
- ・地域内の公的財産の積極的な活用をめざす
- ・運営組織を設置し安心安全な山の暮らしを獲得をする

持続可能な中山間地再生の拠点

施設機能
+
メッセージ

- ・悲劇を売り物にするのではなく、日本の7割を占める中山間地域のどこにでも起こりうる災害をどう克服するか、先人としての教訓と知見を伝える
- ・山の暮らし再生に取り組んできた山古志住民の今までとこれからを伝える施設をめざす

里山の暮らしと再生を次世代/全国に伝語り継ぐ

フィールドミュージアム

持続可能な中山間地再生モデル

山古志の地域全体を1つのミュージアムと位置づけ、象徴的な震災現場を保存し、実物展示として活用する

地域経営のための知恵の集積と仕組みづくりを行い、「新潟(中越)モデル」として全国の中山間地に提示する

やまこし
復興交流館
(仮称)



木籠
メモリアルパーク



旧291号線



ビジターセンター



中越メモリアル回廊

3施設・3パーク



クローバーバス



アルパカ牧場



農家レストラン・直売所

やまこし復興交流館(仮称)

●フィールドミュージアムの基点となる施設

中越大震災の最大かつ象徴的な被災地といえる山古志。被災跡を今に残すフィールドを背景に、他の施設にはないリアリティを提供する

●持続可能な中山間地再生の拠点

山古志が自力で持続可能な地域づくりを進めるための拠点としても整備する地域経営の知恵を集め、実践するしくみをつくる拠点となる

●山の暮らしと再生を次世代／全国に伝える

大震災を乗り越えて持続可能な地域づくりに取り組む姿を全国に発信。再生モデルを次世代に引き継ぐとともに、「新潟(中越)モデル」として全国の中山間地をリードする

被災した人々が等身大で語る施設

長岡震災アーカイブセンター きおくみらい

- ・先進のIT技術を活用した知的情報集積拠点施設
- ・中越大震災の全体像を空間的に把握、中越メモリアル回廊の起点
- ・航空写真の上を歩きながら、情報端末機で情報を入手



川口きずな館

- ・新たな「絆」を築き、豊かな地域づくりを進めるための拠点施設
- ・震災を通して育まれた「絆」にふれ、新たな交流の未来を開く



おぢや震災ミュージアム そなえ館

- ・地震発生から復興への過程をたどりながら学ぶ防災学習施設
- ・地震発生から3時間後、3日後、3カ月後、3年後の様子を再現
- ・自走式地震疑似体験装置で地震発生時の揺れを実体験



やまこし復興交流館(仮称)

テーマ1

中越大震災とはどういう地震だったのか

<訴求内容>

●中越大震災の象徴として「山古志」

山古志の姿と村民の行動を見せることで、中越大震災の本質を伝える。

●今も残る中越大震災の爪痕

間近で見ることができる被災跡を活用し、住民の生の声を集めたりアリティを持って中越大震災の被害と教訓を伝える。

●全村避難が実施された唯一の村「山古志」

全村避難にもかかわらず、山の暮らしに戻り復興をめざした村民たちの想いを伝える。

テーマ2

なぜ人々は、やまに帰ろうとしたのか ～帰ろう山古志へ～

<訴求内容>

●「心の動き」で見る復旧～復興のプロセス

村民たち、子どもたちの心の変化を追いながら、なぜ村に帰ろうとしたのか、復興に向かうプロセスを解き明かす。

●集落の動向に見る復興の原動力

集落の盛衰を追うことで、復旧～復興のプロセスで何が必要だったのか、何が人を動かす原動力になったのかを明らかにする。

テーマ3

人々はどこへ向かおうとしているのか

<訴求内容>

●中山間地の持つ本質的な課題

大震災によって顕在化し加速した本質的な課題(過疎化、高齢化)。山古志が抱えていた中山間地特有の課題を再認識する。

●持続可能な里山づくりへの取り組み

大震災を機に、本質的な課題と向き合った山古志。この山古志の地から持続可能な地域づくりについて考える。

●地域資源の見直しと付加価値の増大

文化・観光・人的資源の価値を見直し、磨き、つなぐことで価値をより増大させる試みを紹介。

●単なる展示館としての機能だけでなく、地域と共に持続可能性を考える施設をめざす。

フィールドを活用した整備の実施

山古志地域全体をフィールドミュージアムと位置づけ、「やまこし復興交流館(仮称)」を基点に、震災現場や山古志の持つ地域資源を訪ねる仕組み・仕掛けを構築。

持続可能な中山間地再生モデルの試行

大震災を乗り越えて持続可能性を獲得するプロセスを可視化した「新潟(中越)モデル」を構築することにより、全国の7割を占める中山間地の再生をリードする。